「名誉」と「排日」
ーーレイシズム史研究のアジア的転回に向けてーー

津田塾大学　山本めゆ

目的　第一次グローバル化とも呼ばれる19世紀後半から20世紀初頭は、人類史上もっとも集中的に人が移動した時期とされる。近年ではアメリカやオーストラリアの移民研究やレイシズム研究から、この時期のアジア人の大規模移動が受入地に与えたインパクトを再評価し、アジア人の流入という危機に対する防衛的反応として国境管理の技術が洗練され、グローバルな白人性が創出されたとする議論が蓄積されてきた。本報告では南アフリカにおける日本人の地位の変化という一見ささいな現象を題材として、レイシズムの世界史そのものに新たな知見を加えることを目指す。

問い・方法　アパルトヘイト期南アフリカにおいて日本人の企業駐在員らは白人エリアでの居住を許され、「名誉白人」とも呼ばれてきたが、そうした地位の起源とされるのが1930年に日本-南アフリカ間で交わされた紳士協約である。当時、南アフリカの移民規制法によりアジア人は「禁止移民」に指定されていたが、この協約によって日本人商人らの条件つき入国・滞在が可能となったからだ。しかし、外務省の記録によれば、この時期の南アフリカへの入国者数は年間数十名とごく少数に過ぎない。この紳士協約は日本人にとって本当に「名誉」の起源だったのか。

本研究は先述の先行研究を批判的に継承しつつ、両国の外交史料・報道などの検討を通じて、南アフリカにおける日本人の地位の変遷を第一次グローバル化とアジア人の移動の世界史のなかに置き直し、上記の問いに答えていく。

結果・結論　従来この紳士協約は、南アフリカが大恐慌による経済的損失への手当てのために日本に門戸を開いたと論じられてきた。確かに短期的に言えば、紳士協約は大恐慌の産物といえる。しかし本研究により、南アフリカと日本の双方が、先例として北米やオーストラリアなど環太平洋諸国の移民規制や日本と交わされた協約などを参照しながら日本人の処遇を検討していたことが明らかになった。送出（日本）側から自国の渡航者の質と量を制限するという自主規制により移民規制の圧力を調停したという点において、1930年の日本-南アフリカ紳士協約は、20世紀初頭の日豪、日米、日加の協約などの延長線上に誕生したといってよい。にもかかわらず一方は「名誉」の起源、もう一方は「排日」といった正反対の解釈が定着してきたのは、ほぼ同時期に発生した南アフリカにおけるアジア人排斥と環太平洋地域のアジア人排斥に関する議論とが接続されてこなかったからにほかならない。

先行研究が示すように、アジア人の大規模移動と、アメリカ・カナダ・オーストラリア・ニュージーランド・南アフリカという「白人定住植民地」との間の軋轢は、アジア人の到来を深刻な脅威とみなす人びとの間に海を越えた家族的紐帯と「白人」という集合的アイデンティティを編成した。いわば、アジア人移民に対する防衛的反応としてグローバルなカラー・ラインが創出されたのであり、その意味においてこの時期のレイシズムの震源地はヨーロッパではなくアジア人との遭遇を果たした「白人定住植民地」だったといえる。大西洋中心主義的なレイシズム史は、このような観点から刷新されなければならないだろう。

McKeown, A. M., 2008, Melancholy Order: Asian Migration and the Globalization of Borders, New York : Columbia University Press.
Lake, M., & H. Reynolds, 2008, Drawing the Global Colour Line: White Men’s Countries and the International Challenge of Racial Equality, Cambridge: Cambridge University Press.